

## 近世後期の秋田院内銀山における医療環境

—『門屋養安日記』を手がかりとして—

藤本 大士

東京大学大学院 総合文化研究科 科学史・科学哲学研究室 修士課程

近世日本医療史研究では、医療を存立させうる社会・文化的背景、すなわち「医療環境」(海原亮)への関心が高まっている。そこで、本研究報告では近世後期の秋田院内銀山における医療制度に注目することで、藩・鉱山経営者ならびに鉱山労働者の医療観を記述することを試みる。

本研究報告では『門屋養安日記』(茶谷十六・松岡精編『近世庶民生活史料 未刊日記集成』第1・2巻、三一書房、1996-1997年)を史料として用いる。院内銀山最初の抱え医である門屋養安によって、天保6(1835)年から明治2(1869)年までの約35年にわたって記されたこの日記には、銀山町での診療活動をはじめとして、鉱山経営者との交流や趣味人として文化・芸能を嗜む様子など、実に多彩な養安の姿が描かれている。

『門屋養安日記』を用いたこれまでの研究は、文化人としての養安の活動を記述したものや、鉱山町の実態を分析したものが中心であり、医師としての養安の活動について検討したものは多くない。そうした中、養安の医療実践に注目した数少ない研究として、蒔昭三による一連の研究報告(日本医史学会および北陸医史同好会)があげられる。蒔は院内銀山での受療者・死亡者の数的把握や薬の購入経路などの医療実務を分析し、養安の医療実践に関する基礎的事項をまとめあげている。しかしながら、蒔の主眼は養安を中心とした医療実態の把握にあるため、藩・鉱山経営者・鉱山労働者たちが養安の医療をいかに捉えていたかについては検討されていない。そこで、本報告では医療制度に着目することにより、藩・鉱山経営者・鉱山労働者の医療観を記述することを試みる。

まず、藩・鉱山経営者が、院内銀山での医療をいかに捉えていたかについて考察する。具体的には、天保期に開始された「抱え医」という身分が、秋田藩でどのような身分的位置づけにあったのかについて検討を行う。近世社会において、公儀(幕府・藩)による民衆への恒久的な医療政策はほとんどみられないということが先行研究によって指摘されているが、『門屋養安日記』にみえる抱え医という制度は、藩による恒久的な医療活動として捉えることが可能であろう。つまり、院内銀山での医療に注目することによって、従来の研究では指摘されてこなかった、藩による医療政策の新たな側面を記述することが可能になると考えられる。

次に、鉱山労働者が院内銀山での医療をいかに捉えていたかについて考察を行う。ここで注目する制度は「友子制度」と呼ばれる擬制的親族関係である。この制度は下の世代への鉱山技術の伝達や若年者への社会教育などの機能をもっていたが、同時に、疾病時や老後の相互扶助を行うという機能も兼ね備えていた。つまり、鉱山労働者たちは自助的救済組織を形成することを通じて、幕府・鉱山経営者が配置した抱え医とは別の文脈・論理によって、医療へのアクセスを希求したと考えられる。そしてこのような友子制度を介した彼らの医療需要の変化を、『門屋養安日記』での受療パターンの変化のうちに見出すことができるだろう。

このように、「抱え医」と「友子制度」という2つの医療制度を医療環境の一部として捉えることにより、医師の視点からみた医療観ではなく、藩・鉱山経営者および鉱山労働者の視点からみた医療観を提示することが本研究報告の目的である。